

2年ぶりにジャカルタの空港に降りた。

私が初めてジャカルタに来たのは1995年で、その時には空港から市内へは、一般道を1時間以上も延々と走ったもんだが、その後、高速道路ができて25分で行き来できるようになった。

ところが今回、来てみるとすごい渋滞である。インドネシア経済はまだまだ低迷しているのに、何だか車が増えたみたいだ。

結局夕方方のラッシュにも巻き込まれて1時間以上掛かってしまった。

インドネシアの治安がよかった頃、もう10年くらい前には、インドネシア各地へ行くツアーがたくさんあった。

見所は、バリ島 ジョグジャカルタ ジャカルタ がメインだったが、1996年の暴動とその後の爆弾テロですっかり事情が変わって、ジャカルタ行きのツアーなんて全く無くなってしまった。

ただ、このジャカルタ、楽しい事、癒しネタ、美味しいものがたくさんあるのである。



## インドネシアの概要

- 1.面積 : 約 189.08 万平方キロ (日本の約 5 倍)
- 2.人口 : 約 2.1 億
- 3.首都 : ジャカルタ
- 4.人種 : 大半がマレ - 系 (ジャワ、スンダ等 27 種族に大別される)
- 5.言語 : インドネシア語
- 6.宗教 : イスラム教 87.1%、キリスト教 10.1%、ヒンズ - 教 1.8%
- 7.略史



7 世紀 スマトラを中心に仏教王国スリウィジャヤ王国が成立。

以後ジャワを中心に仏教、ヒンズ - 王国が興る。

13 世紀 イスラム教の伝来 (アチェ地方)

1512 年 ポルトガル、モルッカ諸島のアンボンを占領

1602 年 オランダ、ジャワに東インド会社を設立。植民地経営に乗り出す。

1945 年 インドネシア独立宣言

1967 年 スカルノ、大統領の権限をスハルトに移譲。

1998 年 ハビビ、スハルトに代わり大統領に就任。

2001 年 メガワティ大統領就任

## ジャカルタテニス

いやいや、癒しだとか、美食などと書いてはいけない。私はここで地獄の合宿生活をすることに

なっているのだ。

何でわざわざ、航空券(57000円)まで買ってジャカルタでテニスをするのか、日本で出来ないのか、とよく言われるが、答えは、“出来ない”のである。

第一に、私の近所には、もう私を負かす奴がいなくなってしまったのである。

少なくとも、【川崎市多摩区長尾7丁目テニス大会、男子30才代 無職の部】では、もう私の右に出るものがまずいない。

友人達とは時々テニスコートを借りてテニスをするが、常々男女平等を唱える私であるから、ミックダブルス中心になってしまう。

これはこれで十分楽しかったりするし、負けても悔しくなかったりするし、実はテニス後の温泉やビールに気を引かれていたりするので、とても熱いテニスとは言えない。

しかし、本来、スポーツの醍醐味とは一対一の男の勝負である。

狭い国土の日本だからといって、テニスの試合と言えば“ダブルス”っていうのじゃあ悲しすぎる。

ダブルスで唯一良いところは、私が放つ炎のサーブの威力が、見た目以上にすごって事を、パートナーの背中が証明してくれるところぐらいだ。

インドネシアでは、もう吐くほどシングルスができる。

第二に、さすがに平日の昼間に、テニスを相手してくれる人は日本にはいない。

強いて言えば、夕方の高校のテニス部くらいだろうが、体力的に男子の部活にはついていけない。女子高生なら何とかついていけるだろうが、局所的に熱いテニスになってしまいそうで、やはりそれはいけない。

やはり自分専用の、きちんとボールを打ち返してくれるパートナーを探す必要がある。

1月のオーストラリア/ケアンズの時には、ヒッティングパートナー兼コーチが、1時間50オーストラリアドル(4000円)という値段だったのですっかり諦めたが、インドネシアは人件費が安い。相手の質にもよるが、チップも込みで、1時間3~5万ルピア(360~600円)である。

第三に、試合もしたいが練習をしたい。

もう最近はほとんどテニスをしなくなり、どんどんとへたくそになっていっているが、それでも部活の様な練習をして上手になりたいものである。

ボールをじゃんじゃん使って練習がしたい。インドネシアには馴染みのコーチがいて、私のへたくそなところを容赦なく攻撃するのである。

第四にテニスコート。

以前、二子玉川で日曜日にテニスをしたら、1時間5300円だった。しかも1時間しか予約できなかった。何か狂ってる。

因みにいつも泊まっているジャカルタのホテルは、一泊朝食込み35万ルピア(4200円)で、宿泊者はテニスコートがただになる。因みにジムもプールもただである。

大体、今のジャカルタに観光で来る客はおらず、ホテルに泊まっているのはビジネス客なので、昼間は使い放題である。

第五にボールボーイ。

玉拾いである。練習でも試合でも、自分で玉を拾わなくていいのは天国である。日本のアマチュアプレーヤーのほとんどは、この極楽を体験したことがないと思う。

インドネシアでは、当たり前のように玉拾いがしてくれる。人によっては、審判まで雇う。もうそうになると、テレビで見るテニスの試合にそっくりだ。レベルは大分違うけど。

ボールボーイの方は、チップも込みで、1時間2~4万ルピア(240~480円)である。

第六にテニス用品。

20日もテニス合宿をすると、私の場合、5回ぐらいはガットが切れる。ガット代と張り替え料で、ジャカルタの場合8万ルピア(960円)。日本だと、4000円近いのでその差は歴然。ボールの値段も大体半分なので安くつくのだ(以前はもっと安かった。最近はジャカルタでも物価が上昇してしまってラケットも6掛けくらいになってきた)。

まあ、そんなこんなで、熱いテニス合宿をするにはジャカルタが最高なのである。

### 一人テニス合宿

ただ、本当に熱い、というか暑い。

テニスコートには1.5リットルのペットボトルの水を2本持っていっても全部飲んでしまう。部屋から持っていく大判のバスタオル2枚もぐっしょり濡れる。

途中でTシャツを着替えるが、毎日2~3枚が完全に濡れる。

左右の振り回しなんかを10分もやると、もう口も利けなくなって10分ぐらい休まないと動けない(玉を拾う必要がないから、プレーが連続になってほんとに辛い)。

私のヒッティングパートナー兼コーチはイブラヒムという名である。もう完全にイスラム教徒って名前だが、その通りイスラム教徒である。

私がかたばって休んでいると、時々、『アイ プレイ』と言って近くの教会に10分ほどお祈りにいく。そのせいか、お祈りに行く前の練習が取りわけキツイ様な気がする。

彼とはもうかれこれ7年ぐらいの付き合いだ。彼は実はヒルトンホテル専属のヒッティングパートナーである。ジャカルタのヒルトンは、世界のヒルトンでも敷地面積がトップレベルのホテルで、部屋数も多いが、テニスコートは、実に15面もある。

その為、ヒッティングパートナーも、ボールボーイもそれぞれ20数名ずついて、イブラヒムは、その中でも一番上手い。何でもヒッティングパートナーのテニス大会があって、彼は毎年優勝しているそうだ。

実は私の泊まっているホテルにもヒッティングパートナーがいるのだが、いつもイブラヒムに来

てもらう。彼の当直が朝番(6時~13時)なので、練習は大体2時から。午前中はジムの自転車漕ぎ(30km)と水泳(1~2km)をしているので、イブラヒムとテニスをやる時には、実は既にもうへとへとなのだが、彼も実は6時からテニスをしているので状況は同じはずなんだけどなあ。因みに年齢も同じである。

## 足マッサージ

インドネシアには古来よりマッサージの文化がある。

商社時代によく行っていたお店に久々に行ってみると、値段は倍に上がっていて2時間の全身マッサージが10万ルピア(1200円)になっていた。タクシー代も馬鹿にならないのでこれはやめた。

代わりに足マッサージを毎日呼ぶ事に。ホテルにはマッサージサービスがあるがもちろん高いので、外部のマッサージ屋に電話して足マッサージボーイに来てもらう。

最初の一週間は、もう全身が病んでいるんじゃないかと思うほど痛かった。

痛いマッサージは良くないと言うが、終わった後の軽い感じが心地よい。さすがにこの年齢になって、一日中、体を動かしているのだから、疲労物質もたくさん溜まっているはず。それが取り除かれるような気分で毎日呼んで、癒してもらっていた。

ところが2週間を過ぎると、もうほとんど痛くない。体の病んでいるところが直ったのかわからないが不思議なもんだ。悲鳴が出るほど痛かったのに。

因みに、交通費込みで、90分の足マッサージが5万ルピア。チップを上乗せして、だいたい毎回7万ルピア(840円)くらい払った。癒しの値段としては悪くない。

## フードコート

ジャカルタには巨大なショッピングセンターが幾つもあって、そして常に最も賑やかなのがフードコートと呼ばれる食堂の様なコーナーである。

インドネシア飯あり、寿司あり、ケンタ、マック、ウェンディーズ、サブウェイ、ラーメン屋、ステーキ屋など何でもあり。

広いエリアにたくさんのお店があって、その中央にテーブルとイスがたくさん置いてある。

庶民の店だから値段は安い。日曜日なんかに行くと、何百とある席が家族連れで埋まってる。庶民の娯楽施設といっても良いだろう。

しかし私は日本では庶民でも、インドネシアでは庶民ではない、ブルジョアジーである。幾らビーチサンダルに短パン、きたないTシャツ、無精ひげでも、ブルジョアジーである。

そんな私が、庶民の食材を食べる事は私の良心が許さない。

やはり高級食材、日本ではもはや幻の食べ物と言われ、なかなかお店では食べる事の出来ないものをインドネシアだから食べたいものである。

そう、牛丼である。ジャカルタには吉野屋があるのだった。

期待していってみると、YOSHI-TORIと書いてある。店名を変更していた。これも狂牛病の影響か？

でも聞いてみると、吉野屋の事だよ、とのこと。鶏肉のドンブリもあるが、もちろん牛丼も置い

である。さすがにイスラム、豚丼はない。

並盛は11,500ルピア(138円)。味も問題ない。というか、むしろ昔より美味くなったか。米が上質になった気がする。生卵と味噌汁、漬物がないのが残念である。

もう1つ残念なのが器。アメリカの様に使い捨てる発泡スチロールになっている。このまま捨てれば確かに川も海も汚れないかもしれないが、資源の無駄使いの様な気がするなあ。

一方、何とこのフードコート、全面禁煙になっていた。喫煙大国のインドネシアだが、変れば変わるもんだ。以前はガンガン煙草を吸い、しかも吸い殻を揉み消しを、食品を運ぶトレーでやる人が多かったので、昔はトレーがところどころ黒く焦げていてとても汚かった。だんだんと野蛮なところがなくなってきている。

### ほかほか弁当とタイチャンラーメン

インドネシアには【Hoka Hoka Bento】と書かれた店がある。すごく有名なチェーン店だ。フードコートには必ず入っている。

ただしお弁当屋さんではなく、レストランである。

17000ルピア(200円)で、定食が食べられるのでインドネシア人に大人気のお店だ。商社時代に通った合弁会社の従業員達は、『今日はちょっと贅沢しよう』という時にホカホカベントーに行くと言っていた。

ホカホカベントーという言葉が日本語であることを彼らは知っていたが、ホットランチボックスだよ、と意味を教えてあげるとしきりに感心していた。『日本で本物のほかほか弁当を食べたい』とも。

ただ、日本のテイクアウトの定番が、500円ぐらいすると知ったら驚くだろうな。

一方、インドネシアには、タイチャンラーメンというチェーン店がある。ここもフードコートには必ず入っている。

日本味のラーメン屋で、ちゃんとした味噌や醤油ラーメン、ニンニクを効かせたスタミナラーメン、青野菜の青菜ラーメンなどがあって人気である。餃子もある。

ここがインドネシアであることを考えると十分美味しい。値段は結構いいお金を取る。

大体行くと一回の食事で5万ルピア(600円)ぐらい使うので、昔は日本人か、インドネシアでも比較的給料の高そうな人が客だった。

しかし今回行ってみると、割と庶民的な人も多く入っていて、しかも味噌ラーメン(小)を食べている私の横で、高いスタミナラーメン(大)に餃子、コーラまで頼んでいるではないか。変れば変わるものである。

### インドネシアの女性

変わったといえば、気のせいかな、それとも先月はメキシコを旅していたせいかな、インドネシア女性がきれいに見える。

2年前より圧倒的におしゃれになったし、肌の色も、白く見せよう見せようと、女性達は頑張っ

ている。日傘をさしている人も多くなった。

インドネシアのP&Gに勤めていた友人によると、UVカットの製品がよく売れているそうだ。

そして現実には、あれほど黒かった女性達の顔が、割とすっきりとした色になった気がする。

インドネシア経済は以前ほどではないにしても、まだまだ混迷を続けているが、女性のおしゃれはどんどん進化しているようだ。

一方、男どもは相変わらず黒い。で、合宿中の私もどんどんと黒くなってきたけど。

## 枝豆

インドネシアの枝豆は実に美味しい。

たっぷり日差しを浴びているからなのか、味が濃いのである。

種は台湾から持ってくるそうだ。でも台湾で食べるものより美味しい。日本で食べるものよりも美味しい事が多い。

10年前は、日本食材屋か日本系列の百貨店(西武やソゴウなど)でしか手に入らなかったが、今では多くのスーパーでも枝豆を扱うようになってきた。インドネシア人も少しは食べるようになったのかも。因みに商品名は『EDAMAME』である。

売り場では、既に枝からもいであり、発泡スチロールのトレイに入ってラップされている。価格は日本の6分の1くらい。

塩は、1キロで2600ルピア(31円)である。

ビールは1缶330ミリリットルで7500ルピア(90円)である。

枝豆を煮るには、もう買ってから7年近くたっている電気鍋を使う。

これ以前は、ホテルの部屋に設置してあるコーヒー&お茶用の湯沸かしで密かに煮ていたが、どうも塩水が沸騰するとショートして壊れてしまう。因みに、私は“先塩派”である。つまり煮る時には塩を入れる。お好みだが、海の塩分、つまり4%ぐらいで煮ることにしている。

そうになると、どうしてもプツプツと弾け飛んだ泡沫が、湯沸かし器周辺に飛んでしまうのだ。で、ウンともスンとも言わなくなる。

いつもの様にハウスキーパーに電話する。

『これ、壊れた。日本製にしたらどう?』

直ぐに別の湯沸かし器を持って来てくれるのだが、途中まで煮えかかった枝豆を再び投入すると、すかさずショートした。さすがに1日に2回もホテルの備品を壊してしまっただけでこりゃイカンと恐縮し、2台目は自然治癒を祈りながらそっとしておいた。

そんな訳で枝豆用の電気鍋を買ったのである。当時で確か3000円くらい出した気がする。

サンヨーだけどインドネシア製なので200ボルト対応である。コンセントの形も日本のものとは違うし、日本に持って帰るつもりもない。これを買う時には、数回しか使わないかもしれないなあと思いつつも、実際にはもう7年、多分300回ぐらいは枝豆を煮ているだろう。最近ではラーメンなんかも作るので、大活躍である。

もちろん日本に帰ってくる時は、ラケットなどと共にホテルの倉庫に預けっぱなしにしてあるので次回の合宿でも使えそうだ。

## バトミントン

インドネシアと言えばバトミントンである。

バトミントンで有名な大会として、2年に1回、Uber Cup(女子)とThomas Cup(男子)という有名な大会がある。当然日本からも参加している。この大会がスナヤンという国立競技場で行われることを知った。因みに宿泊している宿の正面がその競技場で都合がいい。

まずUber Cup。決勝は<韓国>対<中国>。

インドネシアに対する日本の経済援助は、中国に次いで2番目である。その為に日本企業もこぞってインドネシアに進出した。ところが、暴動が起きて撤退する企業が相次いだ。代わって現在進出してきたのが韓国勢である。

今回2年ぶりにジャカルタに来て不思議だったのは、『韓国人?』と聞かれる回数がとても増えたこと。以前は間違いなく『日本人?』だったのである。

私がヨン様に似ているという事情もあろうが、それだけ韓国人がジャカルタに増えたという事だろう。

そして元々、インドネシアの経済を牛耳っているのは華僑である。暴動で中国人が狙われ、一家総出で国外避難していた人たちが現在戻って来ているそうだ。

だから、この<韓国>対<中国>はすごい応援合戦だった。会場は東南アジア系の顔をしたインドネシア人も多いが、韓国人、中国人がたくさんいた。

翌日の男子決勝。<デンマーク>対<中国>である。

またもや華僑パワーの応援はすごい。試合は互角だが、応援は中国が圧倒...、と思っていると、その内デンマークの応援がすごくなってきた。応援しているのはいわゆる東南アジア系の顔をしたインドネシア人。デンマークを応援するのは、『中国人が嫌いだから』だそうだ。こんなところにも国際問題が顔を出すんだなあ。

初めて生で世界トップの競技を見た気がする。アテネには行かなきゃ。

## 合宿最終日

イブラヒムとは練習のみならず試合もやる。

これまで、かれこれ7年間で50回以上試合をやってきたが、まだ一度も勝てたことがない。

ヒッティングパートナーの中には、客にハナを持たせる意味で、わざとアウトのボールを拾ったり、ピンチやチャンスにわざとミスったり、結局は試合に勝たせたりする連中もいるのだが、イブラヒムにはキチンと言ってあって、彼は一切妥協しない。

そんな訳で、毎回2、3ゲームを取るのがやっと。

イブラヒムはそのウマさが目立つせいか、他の客からもプライベートに声が掛かり、ヒルトンの仕事以外にヒッティングパートナーを引き受けている。当然チップは他のヒッティングパートナーより高額なのだが、多くの外国人、特に日本人は満足して払っているようだ。

今回20日に亘りテニスをするにあたり、2年前に渡していたチップより少ない金額を彼に提示した。

『会社やめちゃったからさ、これをお願い』という、  
『まあ、仕方ないなあ、将来金持ちになったらもっと頼むよ』ということで負けてもらった。  
しかもよその客のところへ行けばたくさんチップをくれるのだが、私の為によそを断ってくれるところが心憎い。  
インドネシアの物価は確実に上がっているのだが、“持たざるものへの施し”が根づいているイスラム教ならではである。

そんな経緯もあって、最終日に賞金を懸けた3セットマッチを行うこととした。

『もしイブラヒムが一ゲームも落とさずに2セットを取ったら、私が今持っているルピアから、夕食代と空港使用税とタクシー代を引いた全部をあげる』と言うと、俄然やる気を出した。

さすがに私とイブラヒムの実力差が大きいといっても、一ゲームぐらいは取れるはずである。  
ところが、3人目の子供が最近誕生した彼は、金が必要と言って、これまでのプレスタイルを変えて徹底的に勝ちにきた。

終わってみると6-0、6-0のストレート負け。何ゲームかは、ジュースまで持ち込めたのだが、肝心なところでは絶対にイブラヒムはミスらなかった。完敗である。

やはり、“持たざるものへの施し”が私にも根づいたに違いない。約束通り賞金は全部持ってかれた。

そう言えば、以前彼に勝つ為に、ラマダン(断食月)の、一番暑い2時くらいを狙って試合をしたっけ。その時も完敗。『ハラナカさんとやる時は、水は要らない』何て言われたことがあるなあ。

次の国に続く

= 追伸 =

メキシコでカメラが故障したので、お気づきの様に、このジャカルタ編は写真無しでした。  
撮影は可能なのですが、液晶が完全にパーになり、セルフタイマーなどの操作が難しくなったので修理に出していたのです。

ところが...、キャノンからは、何故か『内部腐食の為、修理不能』と返ってきて、さらに液晶だけという部分修理はしない、という回答。ならばジャカルタに持っていけばよかった。

インドネシア版の宗像仁、イブラヒムを撮影したかったなあ。セルフタイマーで藤堂の姿も。

そしてさらに、返ってきた無修理のカメラは、何とズームが動かなくなり、切り替えスイッチが割れている...。一体どんな検査をしたんだと聞くと、ズームについては腐食が進んだ為、スイッチは分からないから部分修理する、とのこと(部分修理するんじゃないか！)。

あまりに妙だから追求すると、実はカメラの中は開けてないそうなの???。それで内部腐食って分かるの?と聞くと、分かるんです、と。

何だか日本のメーカーもお粗末になってきたなあと思いつつ、今後の写真は、ズームがないものになりそうです。腐食が進んで近々撮影不能になりますよ、との有り難いご神託をもらったけど、まだまだこのIXY400、元気です。